

博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	羽原 彩
論文題目	『源平盛衰記』研究——その叙述の方法と意図——
<p>審査要旨</p> <p>本論文は、『平家物語』の一異本と位置づけられる『源平盛衰記』について、従来、その記事量の多彩さに目を奪われ、何を描こうとしたのかという本質的な問いかけが脇に置かれがちであった研究状況を問題とし、それに正面から取り組んだものである。</p> <p>まず序章で研究史を概観、戦前と戦後で大きく分けた上、1980年代以降の近年の動向を主に取り上げる。かつては出典研究が少なからぬ比重を占めてきたものの、次第に叙述のあり方や成立文化圏といった問題へと視野が広がり、また、『平家物語』諸本との関係や『盛衰記』本文自体の研究も進展、特に1990年代からは、百科全書的と評され、拡散的指向性が主に主張されてきたのに対し、一貫した叙述意図や意識を読み取ろうとする論が見られるようになったと跡づける。そして、本論文の目的は、その流れを受け、表現の源にある求心力を問おうとするものであると表明する。</p> <p>第一章『『源平盛衰記』の叙述方法』は、三節から成る。第一節は、反平家の最初の武力蜂起となった以仁王事件を分析したもの。一般の『平家物語』と異なり、『盛衰記』は同事件を反平家の動きとしてではなく、以仁王は皇位篡奪をはかり、源頼政は即位後の新帝の守護者たらんとしたと語っていると説く。王の発した令旨の文面や頼政の言動から導き出された結論で、朝廷守護者が平氏から源氏へ交替するという枠組みが設定された上での叙述と見る。敗北の因は、頼政のもとに源氏勢が参集しなかったからで、そのことが、後白河院の院宣を得た頼朝の傘下に勢力が結集したと対比され、將軍の有資格者たる頼朝の姿が当初から打ち出されているとして、次節へつなげる。</p> <p>第二節は、いわゆる読み本系のテキスト群にのみある頼朝の挙兵譚を、主に古態を残す延慶本と比較して論ずる。『盛衰記』は、東国の情勢を知らせる二度目の早馬の記事を独自に有するが、それは頼朝勢の急増と、武蔵・相模の勢力を源平どちらの陣営が取り込むかが勝敗の分岐点となることを伝えようとしたものと読み解く。上野・下野より武蔵・相模を重視する姿勢が強調され、結局、武蔵は畠山氏の帰属により、相模は大庭氏の逃亡により、頼朝の支配下に入って東国の趨勢は決したとする。延慶本より後白河院の院宣の重みが増しているとはいえ、頼朝の御教書の持つ意味や源氏重代の主従関係の方が優位で、院宣は名目化していると捉える。にもかかわらず、清盛が高倉院に強要して得た官符と院宣とを対比し、対立構図を鮮明に見せようとする意識的叙述方法が認められるという。</p> <p>頼朝と対立した義仲の描かれ方を問題とするのが第三節。越後の城氏と戦った横田河原合戦の位置を、他本より後にずらして義仲記事をそこに集中させているところに、特別な意図を読み取る。それは、東国の頼朝に北国の義仲を対置させようとするもので、それゆえ東国社会から疎外される姿がことさら描かれ、「北陸道ノ大將軍」なる『盛衰記』固有の呼称が、頼朝のごとく「日本ノ大將軍」とはなりえなかった、地域に限定された將軍としての彼を暗示しているとする。</p> <p>以上、第一章は、頼朝を中心に叙述がいかに意図的に組み立てられているかを分析したものとなっており、なお多様な読みの可能性をも踏まえた周到な論述が求められるものの、『盛衰記』の独自性を解明したものとして相応に評価できよう。</p> <p>第二章『『源平盛衰記』の歴史認識』は、テキスト成立期の歴史状況が本文に投影していることを想定しつつ、頼朝と清盛に向けられた特有の視線を問題とする。第一節では、源義家の系譜に連なる者としての頼朝が挙兵譚の中で強く押し出され、東国武士も義家以来の主従関係の延長線上で捉えられている点等から、義家を始発とする〈源氏の物語〉に組み込まれていると解析する。そして、それは、『保元物語』『平治物語』の増補部分や後出本で義家像がふくらみ、『太平記』でも重んじられている現象と無縁ではなく、当時の時代性の反映ではないかと推察する。</p>	

義家からの血統は、足利尊氏の場合、現実的に重視されたところで、その事実と『盛衰記』との関係性を論じたのが第二節である。歴史研究者が尊氏を義家に結びつけた足利政権草創期の政治的効用を指摘していることを踏まえて、論を展開させる。すなわち、義家・頼朝・尊氏と源氏の系譜をたどって、義家に頼朝を、頼朝に尊氏を重ね見る時代思潮が存在したとし、そうした歴史把握が『盛衰記』に影を落としているという。『源威集』『神皇正統記』『梅松論』『保暦間記』といった作品の記述と合致する方向性を持っていることから得た帰結であり、自ずから成立期を南北朝以後に想定するものとなっている。また、『盛衰記』終結部で頼朝の横暴さを語り、その政治を相対化して批判する点でも、これらの作品とは一致しており、現代から過去を見る視座が等しく想像されるという。

頼朝と同様、「日本ノ将軍」と清盛が呼ばれていることを問題としたのが第三節。この独自の呼称は、他本にある、熊野権現の加護を語る「鱸」の章段を削って、彼の武勲話を連ねていることと連動しており、その勲功はいずれも朝敵を倒すというパターンで描かれ、異例な出世は神の加護によるのではなく、朝敵追討の当然の見返りとする視点が用意されていると見る。平氏重代の宝物たる鎧と太刀も、「本朝守護ノ兵具」と表現されて「日本ノ将軍」所持にふさわしいものとさせられ、その「日本ノ将軍」が清盛から頼朝へと交替したとする歴史認識のもとに語り進められていると結論する。

以上、成立期の探査ともからめて展開されている第二章については、内部分析に加えて、多方面にわたる資料の更なる博搜が求められようが、『平家物語』の誕生当時とは全く異質な後世の価値観で、作品全体が覆われている実態を明らかにしえたのは、誠に貴重と言える。

第三章『源平盛衰記』の人物造型は、東国武士で人徳者ながら追討された畠山重忠が、特別な形象を得るに至っていることを論ずる。第一節では、『古今著聞集』『愚管抄』『吾妻鏡』で語られている重忠像と延慶本のそれとが通底する要素を持つものに対し、『盛衰記』は馬を大切に扱う姿をことさらに描き、十七歳で初陣を果たした時からの人格的成長を明瞭に跡づけ、頼朝をも乗り越えかねない実力の持ち主と語ることで、滅びざるを得なかった所以をも物語るものとなっていると見通す。

第二節では、『盛衰記』の重忠譚が、『曾我物語』の仮名本で新たに加わっている要素と共通する性格を持ち、それが幸若舞曲やお伽草子の重忠像にも通じて、後代的特徴を示していると指摘する。具体的には、物事を見抜く予見者の人格や所持していた太刀の名称が合致、郎等二人の献身的言動が共に描かれるといった点である。さらに、『保元物語』『平治物語』の平重盛の描写が、『盛衰記』の重忠に流用されている事実を明らかにしつつ、仮名本『曾我物語』に認められる重忠を重盛になぞらえる意識は、両者を結びつけた『盛衰記』の記述が基盤となったものかと推察する。

以上、第三章の畠山重忠の人物造型論は、第一章の武蔵・相模武士への特殊な視座との関連からも考察が加えられるべきであるが、伝承性の強い一人物に様々な後代的要素が付加されている実状を解き明かした功績は、大いに認められてよい。

本論文は、全体としてテキスト本文を丹念に読み込み、解析するという姿勢で貫かれている。今後に望まれるのは、より多角的に触手を広げ、種々の史資料から総合的に問題を追究するということであろう。成立の具体的時期等、解明が待たれている課題は多い。本論文は、そうしたより大きな課題解明のための確かな基礎を築いたものとして、高く評価できる。よって、博士（文学）の称号が与えられるにふさわしいものと認める。

公開審査会開催日	2007年 7月 27日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏名
主任審査委員	早稲田大学文学学術院教授	博士（文学）早稲田大学	日下 力
審査委員	早稲田大学文学学術院教授	博士（文学）早稲田大学	竹本 幹夫
審査委員	早稲田大学教育・総合科学学術院教授	博士（文学）早稲田大学	大津 雄一

